

---

# 花火

夏目洋介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花火

### 【Nコード】

N5239E

### 【作者名】

夏目洋介

### 【あらすじ】

花火をテーマに一つの恋を書きました。暖かく優しく見てやってください。

## 第一話 くすぶる

花火

「あつ、サチ？花火しない？」

夜、唐突にタツヤに誘われた。

「いいけど・・・まだ6月だよ？早くない？」

「いいから、いいから。じゃあ、近くの栈橋でな。」

私の返事も聞かずに携帯を切った。

〃

付き合い始めて5年。

周りの友達からはまだ結婚しないの？とか言われている。私自身、意識をしていないわけではないが、今年でもう27歳。身を固めたいというのも事実だ。それに至らないのも肝心のタツヤからまったくそういう話が出ないということがある。彼自身その気がないわけではないと思うが、私が結婚に関する話をしだすと話をかわしたがる傾向が見えるのは確かにある。

最近のデートもまあまあになりがちで、互いの家で映画を見て、ファミレスで夕食をとり、簡単なセックスをして別れるのが定番のコースになっている。

タツヤは別れたがっている？

嫌でもそんな憶測がでてしまう。そんな時のこの花火の誘いだ。正直、とても嬉しかった。定番のデートじゃないのもそうだが、何よりタツヤから誘ってくれたのが嬉しかった。もしかしたら結婚の話なんか出たりして・・・そんな思いが頭をうずまく。

化粧にもいつもより力が入る。タツヤがかわいってほめてくれた紫のアイシャドウを入れよう。服は何にしよう。もういい大人なんだから落ち着かないと思いつつも、ピンクのキャミに白のレースのカーディガン。下はタツヤの好きなデニムのミニスカートにしよう。

準備も済み、いそいそと桟橋に急ぐ。家から歩いて5分のこの桟橋はタツヤに最初に告白された思い出の場所だ。付き合い始めの頃は毎年ここで花火したっけか。そんな思いが駆け巡る。

歩きなれた道なのに何度も転びそうになった。落ち着け私。ミユールで足の裏がすれて痛かったが、桟橋に着き、タツヤを見つけた時にはそんなことも簡単に忘れた。

「ごめん、待った？」

急いで駆け寄って声をかける。久しぶりに走り、胸がバクバク鳴った。思わずひざに手をついてかがみこむ。ハーハーと息を切らす私にタツヤは、

「俺も今来たところだよ。それよりサチ、大丈夫？」

下から私の顔を覗き込む。私は驚いて顔を上げた。

「大丈夫、大丈夫。それより花火しよ？」

「そうだな。」

タツヤはそう言って花火を出した。打ち上げ花火、ねずみはなび、線香花火・・・そこにはたくさんの種類があった。

「よし、花火大会開始だ。」

## 第二話 終炎

最初は二人で手持ちの花火をやった。二人の間に蠟燭を置き、花火に火をつける。シューといった音を立て、花火が鮮やかに光を放ち始めた。

「うわ、きれい・・・」

思わず声が出た。タツヤの花火は色が途中で変わるものみたいで緑から赤へと色が変わっていった。私のは赤一色だがとてもきれいだ。

「次はこれやろうよ。」

そう言っただけでタツヤはねずみ花火に火をつけ、私の前に放った。最初はおとなしくジジッとしていた花火が急にちよろちよると動き出した。思わず逃げ出す私。それを見て大笑いをするタツヤ。その後、も打ち上げ花火などをして楽しんだ。

こんなに笑ったのは久しぶりだろう。思わずそんなことを考えてしまった。タツヤの笑った顔。こんな顔する人だったんだ、私の彼は。花火の光に照らされたタツヤの顔はいつもより素敵に見えた。

たくさんの花火をやり、最後に線香花火だけが2本残った。

「線香花火2本しかないんだね。好きなのに。」

私はそう言っただけで火をつけようとするとタツヤは、

「待つて。一緒につけ始めようよ。」

二人でせゝので線香花火に火をつけ始める。さきつちよの光の玉がジジ、ジジと閃光を放つ。

「きれい・・・」

思わず声に出た。

「そうだな・・・」

タツヤの花火も同じように光を放つ。

「そういえば、何で急に花火しようと思ったの？」

タツヤは少しだまり、目線を下にそらし口を開いた。

「サチ、俺たちが付き合い始めの頃って覚えてる？」

予想外の返事に戸惑ったが、うん、と返事をした。

「俺たち、すごい仲良しだったよな。最初の頃はいつも二人して手をつないで、歩いたなあ。寝るときまで手をつないでないとぶーぶー言ってたっけ。」

「そうだねえ。あの頃はホントお互い夢中だったね。」

それがいつからかつかないだ手は離れ、気持ちも離れてしまったのかな。思わず出そうになった言葉を飲み込む。

「花火もよくしてたな。毎年毎年この場所でやってたっけ。サチ、線香花火がない時なんか本気で怒ってたっけな。」

そうだ。昔から花火が好きでよくタツヤとしていた。線香花火も昔から好きだったんだ。

「旅行なんかもしょっちゅう行ってたっけな。あの頃は金もなくて二人してバイト頑張って金ためたのに、結局俺が体壊して旅行行けなかったりなんかしたっけっか。」

ククツとタツヤが口の角を上げて笑う。私はそんな思い出がすぐには思い出せず、少し立って思い出し、相槌を打つ。

「最近、そういうの無くなっちゃったな。」

タツヤが一言そう言った。

「仕方ないよ。お互いこの年になって仕事も忙しくなってきたし・・・」

線香花火の光が少し弱まってきた。

「この前のデートで見たビデオって覚えてる？」

まったく思い出せない。なんかのラブストーリーかなんかだと思っただが・・・失恋する女の話だっけか。ミュールですれた足の裏がジンジン傷み始めた。

「ここ数年、デートというデートもしてないな。でもそれが当たり前になっちゃっている。」



タツヤが私を目を合わせてくれない。頭の中ではタツヤの言いことが少しずつ分かってきた。でもまだ確認はしたくない。聞きたくない。

タツヤの線香花火がぼとりと落ちた。それをきっかけのように、

「俺もお前ももう27歳だな。もう俺もお前も・・・」

「待つて！」

思わず声が出た。タツヤがビックリしてこっちを見た。

「もう少し・・・もう少しだけ・・・この線香花火が灯っている間だけ・・・。」

頬に涙が流れる。どうか涙で花火が消えてしまわないで・・・

「サチ・・・」

タツヤが悲しい顔で私を見た。タツヤの手にはもう輝きを失った線香花火が残されていた。

季節は夏の一步手前の6月。少し肌寒い日だった。

光を放てば吸い込まれそうな星一つない夜空に、私の線香花火は弱弱しくも美しい火の玉を輝かせていた。

どうか

どうか

消えてしまわないで・・・。

どうか

どうか・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5239e/>

---

花火

2010年10月9日03時36分発行